慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	英学の終焉と学生の英語力の低下： それでも英学の終焉は進歩だったのか
Sub Title	The end to English as a medium of study in the elite education system in Japan in the mid-1890s : Was this a step forward despite the negative consequences for English-language skills?
Author	太田, 雄三(Ota, Yuzo)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2013
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.30, (2013.) ,p.171- 195
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	講演録
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20130000-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

英学の終焉と学生の英語力の低下
――それでも英学の終焉は進歩だったのか――

太田雄三

聴衆の皆様のなかには英学とは何だろうと思われる方がいられるかと思いますが、英語を通して学問をすること位の意味だと思っていただければ結構です。英学が終ったといわれることを一九七八年刊行の 優れた大著、川澄哲夫編・鈴木孝夫監修『資料日本英学史二　英語教育論争史』で使われている言葉を借りて「英学の終焉」と呼ぶとすると、この講演では、まず始めに、英学の隆盛から明治期の終わり近くの終焉に至る諸段階を私なりに説明しようと思います。高度の専門教育の場としての大学では多少の例外はありましたが、少なくともその前の普通教育の場から、教授用語や教科書の言葉としての英語が姿を消し、単なる外国語という一科目になってしまったのが英学の終焉の最もはっきりしたメルクマールだというのが私の理解です。それは明治教育史上の具体的な政策的変化にも対応して起こったことです。英学の終焉には学生の英語力の低下が伴いましたが、夏目漱石が此の文脈での英語力の低下に「日本の教育の進んだ証拠」という洞察に富んだ評価を与え

たことにも触れたいと思います。つぎに、英学の終焉後も普通教育を越えた高度なレベルでは西洋の学術や文化の研究は続き、最高学府の大学で学ぶ学生などにだけは引き続き西洋の学術・文化の進歩についていけるだけの必要最低限の文献読解力を持たせることが教育行政上も重視され続けました。それが英学の終焉後の大正期以降、英語教育をめぐる論争が延々と続く大きな原因になったことについてお話ししたいと思います。最後に、英学の功罪という問題に触れたいと思います。英学の終焉を日本の教育の進歩と受けとめた漱石の見方に挑戦するような最近の現象、英学終焉前の明治期の日本を思い出させるような英語で教える学校・大学の出現や増加、を正しく評価するためにも必要だと思われるからです。福沢研究センター共催の三田演説館での講演にふさわしく、福沢諭吉や慶應義塾関係のことにも触れながら、お話しを進めたいと思います。

一八五九年に横浜が開港したとき一八三四年生まれの福沢は、前年まで大阪にある緒方洪庵の適塾で蘭学を学び、移り住んだ江戸の蘭学者に負けないという自負を持つ二〇代半ばの青年学者でした。その福沢は 開港後間もない横浜に行って、外国人の店の看板の言葉も、商人の使う言葉もオランダ語でなかったので理解できず、大ショックを受けました。そのことによって英学の必要に目覚めるというのは、『福翁自伝』中の有名なエピソードです。[1] 少し前で福沢が、江戸と違って蘭学者に対する需要がない大阪で、純粋に西洋の学問を学ぶ楽しみの為に「目的もなしに苦学した」（一〇九頁）大阪の蘭学学生、適塾の学生達を賛美していたのとはちょっとそぐわない感じがしますけれども、「何でもあれは英語に違ひない　今我が国は条約を結んで開けかかつて居る　左すれば此後［このご］[2] は英語が必要になるに違いない」（一一五頁）と判断し、翌日から「一切万事英語と覚悟を極めて」（一一六頁）英語を学ぶ 為に全力を尽くし始めたのは、福沢の別の、実際的な面の現れだったのでしょう。

福沢にとって幸運だったのは、その時から徳川幕府崩壊までに三回外国に行く機会があったことです。最初の外国行き、一八六〇年の第一回目のアメリカ渡航に関連して「私は亜米利加渡航を幸いに彼の国人に直接して英語ばかり研究して、帰てからも出来るだけ英書を読むやうにして、生徒の教授にも蘭書は教へないで悉く英書を教へる」（一四三頁）と書いています。「英書が六［むづ］かしくて自由自在に読めない」ことを自認し、「便る所は英蘭対訳の字書のみ」（一四三頁）で、オランダ語のほうがよく理解出来たことを自認しながら、福沢は蘭学塾だった自分の塾を英学塾にしてしまったわけです。一八六一年から一八六二年にかけての福沢のヨーロッパ行きも、英学史上意味深い出来事でした。「外に買い物もない唯英書ばかりを買って来た　是れが抑［そもそ］も日本へ輸入の始まりで　英書の自由に使われるやうになつたと云ふのも是れからの事である」（一四六頁）というロンドン滞在中の買い物への言及ひとつを見てもそのことが分かります。一八六七年の二回目のアメリカ渡航はさらに重要でした。政府から支給された多額の金が残っていたのを利用して、福沢は「今度こそは有らん限りの原書を買てきました」（二二六頁）と言っています。「大中小の辞書、地理書、歴史等は勿論　其外法律書、経済書、数学書なども其時始めて日本に輸入して　塾の何十人と云ふ学生に銘々其版本を持たして立派に修行の出来るやうにしたのは実に無上の便利でした」（二二六頁）と『福翁自伝』に書かれています。「教ふる所の事は一切英学と定め　英書を読み英語を解するやうにとばかり教導して」（二四一―二四二頁）と『福翁自伝』に書かれていますが、『慶應義塾百年史』で明治元年（一八六八年）から明治一四年（一八八一年）の間に定められた慶應義塾の課程表の類をみると、指定教科書は確かにほとんど全部英書です。(3)

今日まで続く有力な私学で英学の終焉以前の時期にどのような教育が行われたか三つほど例を挙げてみます。まず、英学の大中心だった慶應義塾での英学の教え方は、英語を母語とする人を先生として雇ったわけでもあ

りません。『福翁自伝』には 教師について、「皆本塾の先進生」（二五三頁）とあります。彼ら自身の受けた教育からして英語で授業することは思いもしなかったでしょう。彼らの関心は、英書の意味を理解させることに集中していましたから、日本語を教授用語にし、いわゆる訳読の方法を使うことに対するためらいがありませんでした。 須田辰次郎という人が「旧時の義塾」という文章のなかで、「当時の教授法は知識を授けると云はんよりは寧ろ英書の購読法を教ゆと云う方適当ならんか」[4]と回想しています。

同志社大学の前身の一八七五年創立の同志社英学校では慶應義塾以上に英語を使っていました。京都府学務掛による「同志社視察の記 第四回明治十二［一八七九］年十月」に出てくる「教場ニ至レハ教員市原盛宏迎ヘ入レ曰ク是ハ第三年生ナリ唯今デビス氏著述ノ代数学初歩ヲ授クト場中業ヲ授受スルニ悉皆英語ヲ用フ」[5]に見られるように、同志社英学校では英書が教科書だっただけでなく、日本人教師も生徒も、教室では英語しか使わないという徹底した英語による教育がなされました。

一八八二年に創立された早稲田大学の前身の東京専門学校では、教えた科目の多くは西洋起源の学問でしたが、日本の「学問の独立」[6]をめざして、もっぱら日本語を使って教えました。「東京専門学校開設広告」には「政治経済法律及び理学の教授は専ら邦語講義を以てし」[7]と書かれていました。

明治の終わりまでに英学の時代が終わってしまったと言われる背後にはどのような変化があったのでしょうか。一時期もっとも極端な形で英学が教えられただけでなく、英学の終焉を迎えた時期が最後になったエリート養成のための国立教育機関での変化を見ていきましょう。

私は、学生時代にフルブライト交換教授として東大にやってきたカナダの大学の先生の演習にでたことがあります。その先生が内村鑑三について博士論文を書いた方だったので、内村の書いたものをかなり読みました。

不思議に感じられたのは、北海道大学の前身である一八七六年創立の札幌農学校で一八七七年から一八八一年まで学んだ二期生、内村鑑三の同級生宛の手紙が、在学中だけでなく、卒業後も長い間 英語で書かれていたことでした。その理由を考えるうちに、札幌農学校や一八七七年（明治一〇年）に発足した東京大学などの日本最初の高等教育機関で学んだほんの一握りの最初期の学生の中から、その英文著作が今日まで読み続けられている内村鑑三、新渡戸稲造、岡倉天心が出た理由が分かりました。

後世の日本人から、その英語力を感嘆された人々の例として挙げた三人は、福沢のほぼ一世代あとの人達です。一八六二年生まれで、一時五〇〇〇円札の肖像に使われた新渡戸は、自分の受けた教育について次のようにいっています。「今の高等学校の前身である東京英語学校へ入つた頃には、何から何まで英語でやつた。数学でも地理でも、歴史でも、みんな英語でやつたものである。それがために、英語の本を読むのは大へんやさしい」[8]。

新渡戸がここで、「今の高等学校」と言っているのは、第一高等学校、いわゆる一高のことです。「何から何まで英語でやつた」という言葉の背後には、教科書が英書ということの外に、先生も英語を母語とする外国人であったことがありました。一八七七年に来日して東京大学の初代動物学教授を一八七九年まで勤めたモースは、名前は変わっても新渡戸が一八七七年まで学んだのと同じ学校の学生達を観察して次のように書いています。「大学予備門に行って英語を学んでいる少年達は、お互いの間では好んで英文の手紙を書いている。それは、その方が〔日本語で書くより〕やさしいからである」[9]。新渡戸の受けたような教育が生み出した変化は、何語で自己表現をするかという問題にも関わっていたのです。同じく札幌農学校二期生で、札幌農学校入学前も新渡戸や内村の同級生だった宮部金吾は、後に山本泰次郎訳編『宮部博士あての書簡による内村鑑三』に寄

せた序文のなかで、なぜ、自分と内村の間に交わされた手紙の多くが英文の手紙であるかを説明して、「心中の情緒や思想を最もよく言い表わすには、英文に限ると私たちは思って居た」[10]といっています。なお、モースは福沢とも慶應義塾とも接点のある人でした。例えば、磯野直秀『モースその日その日』に、「福沢諭吉はモースを高く評価しており、明治十一年十二月十八日付の田中不二麿宛書簡でモースを東京学士会院の会員に推薦したほどだった」[11]と書かれています。モースも福沢を高く評価しました。日本体験に基づいて後に書いた *Japan Day by Day* で「日本で会った多くの有名人の中で、福沢氏は行動力においても知力においても最もしっかりした人の一人だという印象を受けました」[12]と書いています。モースが慶應義塾で進化論についての講演をした一八七九年七月一一日には、モース、メンデンホール、フェノロサとあわせて三人の最初期の東大教授が慶應義塾を訪問しています。[13]開学当初の高等教育機関では、主要な教師陣は日本語で教えることの出来ない外国人からなるだろうと予想されたことが、新渡戸達がそれらに進学する前の段階で、教師も外国人、教科書も英語という教育を受けた理由でした。その結果として新渡戸達に生じた変化をどのようなものと理解すればいいのでしょうか。私は初版が一九八一年に出た『英語と日本人』を書いたときから、彼らの全部でないにしろ、かなりの人の母語が英語になってしまったとみるのが一番深い理解ではないかと思っています。

最初に覚えた言葉が母語だという定義は不十分だと思います。津田塾大学の創始者として記憶されている津田梅子のように、僅か六歳の時に渡米し、一〇年余のアメリカ留学から帰国したとき、英語しかできなくなっていて、その後も生涯ほとんど英語ばかり使い続けたというようなケースがあるからです。大脳生理学者、林（はやし）髞（たかし）は「満九才～一二才までに入った言語は母国語となり得るがそれより年齢が進んでから勉強した語学は断じて母国語とならぬ」[14]といったことがあります。私は上限が一二歳だとは思いませんが、母語になり得る年齢と

いうものはあると思います。新渡戸などが学んだ東京英語学校の前身といえる学校でも初めは「幼年ノ間ハ和漢ノ学肝要ナルヲ以テ十六歳以上ニ非サレハ入学ヲ許サス」[15]という規則がありましたが、やがて規則が変わり、新渡戸達は英語が母語になり得ると思われる年齢で、外国人教師から英書を使った教育を受けたほぼ最初の学生になりました。

彼らが英学教育を受けた時期は西洋文明に対する強い関心とそれに伴った自国語と自国文化に対する軽視ないし蔑視が目立つ時期でした。後の文部大臣森有礼が英語を国語にという日本語廃止論と思われることを書いたのが一八七二年から一八七三年にかけてです。[16]ちょうど其の頃から、先生も英米人、教科書も英書といった教育を受け続けたのが新渡戸や内村などの世代のエリート学生だったわけです。彼らの英学的教育も多かれ少なかれ日本語と日本文化を犠牲にした教育でした。宮部金吾はやがて国際的に有名な植物学者になりますが、六〇歳以上の老教授になっていた一九二二年にアメリカの学術雑誌のなかで「英語を話したり書いたりすることがたいていのアメリカ人よりうまい」[17]と評されています。宮部の受けた教育が彼の母語を英語にしてしまったと考えると、驚くことでもないのです。宮部は徹底した英学教育のマイナスの面をも感じつづけたようです。彼は七〇代になってから発表された文章で、自分達の受けた教育を「一種変態の教育」と呼び、そのために「今日漢学の素養が少ないので非常な不便を感じてゐる」[18]と言っています。同じように「変態の教育」を受けた人間が外国人向けの日本文化を説明する英文著作を書いたりすると、問題は個人の便・不便を越えてしまいます。欧米で広く読まれた英文『武士道』の著者新渡戸を例にしましょう。欧米で日本研究がまだ未発達だった当時のことを考えると、此の本を激賞した欧米の書評者達がこの本を高く評価したのは、書中に表れた新渡戸の西洋に関する知識に感心して、自国のことについてはなおさらよく知っているに違いないと思いこんだ為

だと思います。新渡戸が受けた「変態の教育」のため、日本文化についての知識が貧弱だとは想像できなかったのです。新渡戸が一生彼の世代のエリート教育のマイナス面を克服できなかったことは、六〇代後半の晩年に早稲田大学で行った講演をもとにした『読書と人生』に出て来る「私は和漢の方はあまりよく知らないから自然英語の話になりますが」[19]といった言葉からも感じられます。ごく少数の、日本語が良く出来て新渡戸の『武士道』を批判的に読むことの出来た欧米人、例えば、古事記の翻訳などで知られ、東京大学の外国人教授の中では最初の名誉教授になったチェンバレン、はこの本を高く評価しませんでした。明治に来日した外国人のうち特に日本文化に興味を示したハーンやチェンバレンなどは、教育程度の高い日本人からは日本文化について学ぶことが出来ないことに気付いていました。[20]

自国の名誉を守りたいというナショナリスト的感情のため、新渡戸や内村が日本文化を英文著作によって欧米人に紹介した先駆的日本人になったのは皮肉です。かれらの出る前は、日本人自身の日本文化の軽視のためと欧米の読者が感心するような英文を書ける日本人がほとんどいなかったため、日本文化を紹介する著作を書くのはほとんど外国人ばかりだったのです。新渡戸が露呈している不思議な無知、例えば、武士道という言葉は自分の造語で、彼の本が出るまでは武士道という言葉はなかったと長い間信じていたこと、から見ても、新渡戸の武士道についての知識は貧弱でした。それだけでなく、新渡戸は、日本語で書いた日本人向けの文章では、鎌倉時代に武士道が始まってから、日本人は「無理な発達をしてきた」というような、英文『武士道』における武士道理想化とは大分違うことをいっています。[21]一八九四年に出版された内村の *Japan and the Japanese* は後に改版されたときは、*Representative Men of Japan* という題になりました。私が学生時代に読んだその日本語訳『代表的日本人』の解説などでは内村が如何に日本的な人間だったかが強調されていました。確かに、

この本は一八九五年に出た札幌農学校の学生達が出していた雑誌にのった書評[22]で指摘されたように、「外人の我が国人を軽蔑する」ことに反発する調子に貫かれていて、直接間接のアメリカ批判に満ちています。反面では、彼はほとんど同じ頃に書かれた『地人論』（一八九四年）で、「米国は実に二千年間の文明諸国の希望なり[23]」といっています。彼がアメリカを世界最良の国と思っていたことを示す言葉も少なくありません。大人にならないうちに二つめの文化に曝された彼は、一世代前の福沢と違って内部矛盾に満ちていました。学生時代からの友人に中年になっても英文の手紙を書き続ける人間を非常に日本的と見るような見方は表面的なのです。内村は *Japan and the Japanese* の初版が出た数年後の一八九九年に書かれた「余の今年の読書」という文語の文章の中で、次のような意味のことをいっています。「英語の本を読めるようになってから、和漢の本は、読んでも面白く感じられなくなった。……だから、自分は和漢の本を一ページ読むとすると、その五〇倍の五〇ページは英語の本を読んでいる[24]」。

新渡戸に数年遅れてやはり後の一高で学んだ一八六七年生まれの夏目漱石は一九一一年（明治四四年）発表の「語学養成法」という文章のなかで、「吾々の学問をした時代は、総ての普通学は皆英語で遣らせられ、地理、歴史、数学、動植物、その他如何なる学科も英語の教科書で学んだ……[25]」と言っています。漱石も英学終焉前に教育を受けた一人でした。ただ、漱石が学んだときには、先生は日本人になっていました。それでも、漱石が「吾々の時代になつても、日本人の教師が英語で教えた例がある[26]」といっています。前の時代の名残があったため、初期の慶應義塾での教育とは多少の違いがあったようです。

漱石は自分達の世代の学生達の方が、「語学養成法」が発表された頃の 学生達よりずっと英語力が上だったことを意識していました。これは、上述の「語学養成法」で、「英語の時間以外に、大きな意味に於ての英語

の時間が非常に沢山あったから、読み、書き、話す力が、比較的に自然と出来ねばならぬ訳である[27]」といっていることから分かります。

英学の終焉への決定的なステップは、高等教育機関進学前に将来のエリートが学んだ学校から、今度は英語で書かれた教科書まで姿を消し、英語が英学の為の手段という性格を失い、単なる外国語という一科目になったことでした。夏目漱石が「語学養成法」の中で、「余の見る所では過去の日本に於いて最も著しく人工的に英語の力を衰へしめた原因がある。それは確か故井上毅氏が文相時代の事であつたと思ふが、英語の教授以外には、出来る丈日本語を用ゐて、日本の language に重きを措かしむると同時に国語漢文を復興せしめた事がある」と書き、二、三行後に「要するにこの人為的に外国語を抑圧したことが、現今の語学の力の衰退に與かつて力ある事は、余の親しく目睹［もくと］した所である[28]」といっているのがこの変化です。井上毅が文部大臣を務めたのは一八九三年三月から一八九四年八月の短い期間ですが、辞任直前の一八九四年七月に同年九月から施行の高等学校令が公布され、それまで高等中学校と呼ばれていた学校は高等学校になりました。井上は高等学校令公布の前の一八九四年五月に招集した高等中学校校長会議への諮問事項の一つとして、「高等学校ハ授業ニ外国語ヲ用ウベキヤ[29]」を入れています。井上は一八八一年の建白書の中で既に、中学のカリキュラムから英学を除き、西洋関係のことは翻訳書で学ばせ、国文と漢文を重んずることを提案していました[30]。漱石が英語を単なる外国語という一科目にするという、彼の目から見て学生の英語力低下の最大の原因を生み出した張本人が井上毅であると思ったのは、当たっていると思います。

この頃までには、同志社からも「本校ハ正則英語ヲ以テ諸学科ヲ教授シ」と学則で定めていた同志社英学校は姿を消し、その後身の一つである同志社普通学校高等部の廃止（一八九〇年）とともに色々な学科を英語で

教えるという教育法は姿を消していました。[31]

丸山真男・加藤周一『翻訳と日本の近代』[32]で指摘されているように、明治時代の早い時期でも驚くほど沢山の西洋の本が翻訳されていました。だから、英学終焉の前の時期でも、英語が読めなければ、西洋文明や西洋起源の学問について学ぶことが出来ないというわけでもなかったのです。『翻訳と日本の近代』に紹介されている一八八三年（明治一六年）出版の矢野文雄『訳書読法』[33]を読んでみると、翻訳書をどういうものからどういう順序で読んで行ったらよいかを説明したあとに来る最後の第一〇章「前記ノ順序ニ遵テ読ムヘキ書目」では、「早稲田専門学校ニテ追々出版スル教課書」も「政治、法律、経済、地理ノ専門書」[34]として推薦されています。旧制の高等学校が、英書から日本語の教科書に変えることが出来たのは驚く必要がないように思われます。

『東京大学法理文学部一覧、明治十二、十三年』に「将来邦語ヲ用ヒテ教導スルヲ以テ目的トスト雖モ現今姑［しばらく］英語ヲ専用シ」[35]と書かれているように、東京大学では創立後しばらくは、法理文学部に入らない医学部は別として、英語が規則で決められた教授用語でした。しかし、将来は日本語で教えることを目指すけれども、という意味の但し書きがついていたのです。事実、明治時代の終わりまでには中等教育段階でのエリート校からだけでなく、大学からも外国語・外国語文学などを教えるごく少数の例外は別として外国人教師は姿を消しました。前身の一つの一八七四年に生まれた東京開成学校時代からあわせて考えると、東京大学は洋学一辺倒の学校でした。東京大学に始めて和漢学の一科が置かれ、洋学以外のことも多少教えられるようになったのが一八七七年のことでした。当時の加藤弘之東京大学綜理の上申書には、従来のままでは、「自ラ日本学士ト称スル者、唯［ひと］リ英文ニノミ通ジテ国文ニ茫乎タル」[36]恐れが述べられていました。日本語と日

本文化をなおざりにしすぎてはいけないと思う人は早くからいたようです。また、東京専門学校に見られた日本の学問の独立という意識が国立大学の関係者にもあったことは、始めはドイツ人の教授が中心だった東京大学の医学部から一九〇一年までに外国人教授が全て姿を消してしまったことからも想像されます。

漱石は、全ての学問を英語の教科書を通して学ぶといった教育が衰えることを「自然の大勢」と思いました。「語学養成法」でその理由を二つ挙げています。一つは、そのような教育はまるで植民地の住民の受ける教育のようで、独立国の国民にふさわしくないといった感情が自然にそういう教育を衰えさせることです。第二の理由については漱石自身の言葉を一部引用して見ましょう。「学問は普遍的なものだから、日本に学者さへあれば、必ずしも外国製の書物を用ゐないでも、日本人の頭と日本の言語で教えられぬと云ふ筈はない」。漱石はまた学問普及といふ観点からも日本語で教えることが望ましいことを述べています。それが学生の英語力の低下を生み出したにせよ、英学の時代が終わったことは、日本の教育の進歩の証拠なのです。「学生の語学の力が前より衰へて来たのは誠に正当な現象で、毫も不思議がる訳はないのであるし、又同時にそれは日本の教育の進んだ証拠でもある」[37]と漱石は言っています。

英学の終焉とともに急に目立ってくるのが、今でも終わったと言えない英語教育論争です。それは、英語の必要を切実に感じない国民の多数の立場から見るときと、指導的地位を占める人々の中にかなりいた、英語のよく出来る学者や文化人などを将来もある程度確保する必要を感じ続ける人々の立場から見るときとでは、英語の教育上の重要性が違って見えたためだったと思います。福沢が、日本が日清戦争（一八九四―一八九五）に勝利したとき、それを明治維新以降の日本の「改進々歩」（三八〇頁）の顕れとして、大喜びした事は『福翁自伝』に書かれています。一〇年後の日露戦争（一九〇四―一九〇五）での日本の勝利は明治維新以来の西

洋の先進国をモデルにした諸改革の成功を一層雄弁に物語るものとして国の内外で受け取られたようです。しかし、日露戦争後といえども、もう西洋の先進諸国から学ぶ事はなくなったと日本の指導者や知識人の大多数が思ったわけではありません。

漱石は、一九一一年の「語学養成法」で、諸学科の英語教科書の廃止には当然語学力の低下が伴うことを予想すべきだったのに、今になってそのことで大騒ぎをしているのは可笑しいといった意味のことをいっています。[38] しかし、一九〇〇年にはすでに、英語教科書の廃止に伴う学生の英語力の低下に対する対策と思われる文部省令が公布されていました。将来大学に進学して最も外国語の必要を感じると思われた高等学校大学予科の学生の履修すべき外国語の時間数が大幅に増やされたのです。[39] 一九一〇年に一高に入学した文科系の学生、後の東京大学総長の矢内原忠雄の一九一一年の九月一日の日記に出てくる新学期の時間割を見ると、英語とドイツ語かフランス語のどちらかを選択させた二カ国語の語学の授業が、週三二時間の授業時間のうち一八時間をしめています。[40] 英書が使われていた高等中学時代にはなかった時間数の多さでした。一九三四年に入学試験を受けて一高から東大の法学部に入った丸山真男は、その年から始めて外国語（英語、ドイツ語、フランス語）のほかに、作文が入学試験科目に加わったけれども、作文の比重が低かったので、合格か不合格かはほとんど語学の成績で決まったと言っています。[41] 満州事変後の、アメリカ、イギリス、フランスなどとの緊張が高まる時期になっても、欧米の学問・文化が大学では重視されていたのです。英学の時代は終わっても、英語を通して学問をする人間がいなくなったわけではなく、文部当局もそういう人間を必要最低限確保しつづける必要を感じた事が、エリート教育のカリキュラムのなかで語学としての英語（それにドイツ語とフランス語）が重視され続けた理由だと思います。少数のエリート学生の英語力を確保するためには、まだ彼らが旧制高等学校の

入学試験に合格して将来のエリートとしてのコースに乗らない、五年制の中学校の段階から英語の授業のためにかなりの時間数を割り当てる必要がありました。中学校の学生の中には旧制高等学校というエリートコースに乗らずにほとんど英語を使う必要のない人生を送る人も沢山いたのですから、中学校でそんなに英語を教える必要があるかを疑問視する人がいたのも不思議ではありません。

最後に、英学の功罪ですが、功についてはいうまでもないと思います。英学の前の蘭学の場合は、日本人が蘭学を学んだのが主に欧米の数カ国と通商条約が結ばれ、日本が本当の意味で開国する前のことでしたから、オランダ語の文献の入手も簡単ではなく、西洋の事情についても、西洋の学術についても、蘭学を通して学べることには英学の時代に比べれば制約がありました。

英学のマイナス面として、日本文化についての無知や、それとのゆがんだ関係を生み出すことがあったことは英学の最盛期に教育を受けた新渡戸や内村を例にしてすでにお話しました。明治期のはじめごろは、西洋人だけでなく、教育のある日本人の多くが、文化ないし文明の面で、日本は西洋に比べてずっと遅れた国だと思っていました。福沢も一八七五年刊行の『文明論之概略』のなかで、文明を進める上で必要な智と徳の二要素のうち、日本が特に遅れていると思った智について、「日本人の智恵と西洋人の智恵とを比較すれば、文学、技術、商売、工業、最大の事より最小の事に至るまで、一より計えて百に至るもまた千に至るも、一として彼の右に出［いず］るものあらず」[42]と書いています。そういう見方をしなかった例外の一人はモースです。彼は色々な国々が野蛮国、半開国、文明国というように単純に分類出来るとは思わなかったようです。*The Popular Science Monthly* の一八七八年一月号に発表した文章の中で、日本のめざましい西洋文明摂取に触れた時、誤解を避けるために彼は日本人が「多くの点で我々の文明を遙かに越える独自の文明を有する」ことを述べてい

ます。[43] 日本から帰国後のモースの後半生では重点が動物学者としての仕事から、日本文明のすばらしさを著書や講演によってアメリカ人に説明し、それから学ぶことを訴えることに移りました。[44] かなりの日本人がモース的見方にも一理あることに気付くには何十年もかかりました。

英学の時代が終わってもエリート養成機関としての旧制高校で、外国語に非常に大きな比重が置かれる間は、教育ある人ほど西洋志向が強いという傾向は変わらなかったと思われます。旧制高校は戦後になってまもなく廃止に決まり、一九四八年四月から新制高等学校が発足しました。新制高校は名前は同じ高等学校でも、少数のエリートの教育の場ではなく、高校生は増え続け、やがて入学年齢の国民の大多数が学ぶ学校になりました。大学の数も大幅に増えました。戦後の大学卒業者が、学校教育の場で受けた外国語の授業の総時間数は、戦前の大学卒業生に比べれば、かなり少なくなりました。それとともに学生の英語力は、漱石が「語学養成法」を発表した頃よりも一層低下しました。

戦後の日本人の大多数は、英学の終焉に至るまでの教育史的知識の欠如のためもあって、なぜ日本人の英語力が概して低いかについて正当な理解を持てませんでした。ある人達は、日本人はもともと語学の才に欠ける国民ではないかと疑いました。しかし、北大の前身の札幌農学校の初代教頭のクラークは開校に先立って東京でも札幌でも入学志願者の試験をしましたが、札幌で大半は入学許可にならなかったと思われる四九人の入学志願者の試験をした後でさえ、「彼らの多くは十分新入生となる資格がありました。彼らは英語をとてもよく読み理解しますし、英語を書くことはたいていのアメリカの学生よりすぐれています」[45] と書いています。アメリカに一時帰国中の一八七八年二月二〇日のデトロイトでの講演で、モースが東京大学の学生の英語力に「一人残らず英語を完璧に話す」という意味の高い評価を与えたことがセーラム・ピーボディー博物館に保存され

ている新聞記事の切り抜き（Box 23）から分かります。日本人が先天的に語学の才に欠ける国民だとは言えないのです。その外、中学、高校と何年も英語をやっているのに使える英語にならないのは、日本の学校での教え方が悪いのだと言う人が沢山います。日本の学校での教え方が理想的なものでないにしても、焦点を読解力から聞くとか話すとかいう能力の養成に移すべきだといった提言が見逃していたことがありました。一つは英語の時間中にどんなに教室内で英語を使おうと、一歩教室外に出れば、また日本語だけの世界に戻ってしまうため、会話能力に重点を置いた授業は長い間、使う機会がないという意味で、使えない英語を教えるものだったことです。[46] もう一つ、英語の授業に不満を持つ人が見逃しがちなことは、Benedict Anderson, *Imagined Communities* などでも印象的な言葉を使って指摘されていること、つまり人間の寿命が限られていることが莫大な時間を必要とする言語習得を制限していることです。そのため、多くの人々が学校の授業に出るだけで満足のいく英語力を身に付けるには、授業時間数が全く不足していることに気付かないようです。最近、ハンガリー生まれの天才的科学者の伝記を読んだら、乳母からハンガリー語を習い、家庭教師達からはドイツ語とフランス語と英語を習ったという意味のことが書いてありました。[47] 各言語ごとに住み込みの家庭教師がいたのかも知れません。学校での語学の時間数が少なくても、こういう環境で育てば複数の言語習得も容易ですが、日本ではまずないことでした。

一九八〇年代ぐらいから国際化の必要が叫ばれ、日本はやがてグローバル化の波に洗われるようになりました。それとともに英学の終焉とともに姿を消したと思われた、日本人が学ぶ学校なのに英語が主要な教授用語として使われる教育機関がまた姿を現し始めました。一九九二年から他の学校に先駆けて授業のかなりの部分を英語で教えている沼津の加藤学園とか、二〇〇五年に生まれたぐんま国際アカデミーなどがそういう学校の

例ですが[48]、最近では授業のかなりの部分を英語で教える大学も増えてきました。朝日新聞デジタル版を見ていたら、二〇一三年四月一三日付けの記事の中に「東大が新入生を猛特訓「英語、中国語は当たり前」」という見出しの記事が目に付きました。そのなかに、大学における英語で行う授業の増加の傾向に関して「今後五年程度で外国人教員約一〇〇人を雇い、教養の授業の半分程度を英語で行う改革を計画」している京都大学などが例として挙げられていました。

多国籍企業とか、日本にありながら社長が外国人で社内の「公用語は英語」の会社とか[49]今日の日本には、漱石が生きていた時代とは大分違ってきている面があります。私は九〇年代ぐらいから復活し始めた一見明治時代の英学教育と似たように見える教育法は、グローバル化の時代の日本人の一部の人達の要求に応えるものである事を認めますが、よく考えると、似て非なる面があります。明治期の英学時代にいろいろな科目が英語で教えられたのは、英語を習得させる方便ではありませんでした。慶応義塾で英書ばかり読ませるような教育方法をとった動機を説明した『福翁自伝』の一節に「畢竟私が此の日本に洋学を盛んにして如何［どう］でもして西洋流の文明富強国にしたいと云ふ熱心で」（二四二頁）と書かれています。ここで、洋学という言葉を使った福沢は、英語以外のヨーロッパ語を通しての洋学も否定していなかったと思われます。要するに、大事に思われたのは学問だったのです。

モントリオールの通りの一つに一九三四年設立のマギル（McGill）大学付属の研究所の一つ、モントリオール神経学研究所、の所長を長年勤めたペンフィールドを記念して名付けられた通りがあります。彼の自伝[50]を読むと、英語を母語とし、まずアメリカとイギリスで学んだペンフィールドが、壮年になってからも新しい外国語を学び、自分の専門分野に関する新しい知識や技術の習得に努めたことがわかります。例えば、一九二四年、

三六歳の時に彼はノーベル賞受賞の高名な学者のいるスペインのマドリードに行って半年ほど過ごしました。必要最低限のスペイン語は出発前に語学校に通うなどして覚えていったのです。[51] 一九二八年にはドイツの高名な神経外科医兼神経学者のもとで学ぶためにドイツに行っています。ドイツに着いたペンフィールドはまず、ドイツ語しか通用しない田舎町に住み、英語を一言もしゃべらないドイツ人女性を住み込みの家庭教師として雇ってドイツ語習得に専念しました。[52] モントリオールに移住後は、フランス語を熱心に学び、フランス語を母語とする研究者との学問的交流に努めました。[53] ペンフィールドと終焉前の日本の英学とを比べると、ある学問を外国語を通して学ぶことが、その外国語を学ぶための方便になっていないことは同じでした。

かなりの科目を英語で教えている日本の学校のホームページにいってみると、そういう教育法を英語イマージョンプログラムと呼んでいるようです。イマージョンプログラムは特にカナダで盛んなようですが、イギリスの植民地だったところとフランスの植民地だったところが一緒になったため、一九六九年の公用語法が英語とフランス語の二つを国としての公用語に定めている上、公用語以外の言語を母語とする人々も多数移民として受け入れてきたカナダの言語情況に応じたプログラムだからでしょう。私の勤めていた McGill 大学のあるモントリオールは、フランス語を州の唯一の公用語にしているケベック州第一の大都会で、多数派の言語、フランス語、を母語としない生徒の通う学校でのフランス語イマージョンプログラムが盛んなところです。カナダでのイマージョンプログラムは確かに母語以外の言葉を語学の授業として学ばせるというより、それでいろいろな科目を学ばせるのですが、その理由は母語以外の言葉を使っているところが学問的により進んでいるからではありません。その意味では、カナダの具体的な言語状況に対応した言語習得のプログラムだと私には思われます。[54] 明治期の日本の言語情況は全然違いました。無視できないような数の英語を母語とする土着の住民

も移民もいませんでした。だから、明治期の英学は決して言語習得のプログラムではありませんでした。そのため、母語の日本語でいろいろな科目を教えることが可能になった段階で英学が終焉を迎えたわけです。

現在の日本にも数百万人の人々が英語を母語として話している地域があるわけではなく、イマージョンプログラムを大学以前の段階で広く導入するような客観的情況はありません。

京都大学のようなところが英語で教える授業を増やしたとき、それらを履修する日本人学生は帰国子女などの例外を別にすれば、多いとも言えない高校修了までの英語の授業の時間数のためもあって、学問的な意味では同じ科目を日本語で学んだほうがよい学生なのではないでしょうか。

漱石が教育の進歩と考えた方向に逆行するように見える最近の傾向の評価ですが、外国から学ぶべきものを学ぶということと自国の文化や言語を尊重することとのバランスが崩れていた時代があったように思われます。明治の初めの森有礼が英語を国語にすることを主張した頃がその一つでした。第二次世界大戦終了直後に作家の志賀直哉が森有礼の言ったように英語を国語にしておいたらどんなに良かっただろうと、また一種の日本語廃止論をとなえたころもその一つでしょう。[55] 最近では二〇〇〇年にいわゆる英語第二公用語論が議論された頃からいままでがそうかも知れないと思います。[56] いずれも、日本人が危機感を抱いたり、自信を失ったりしていた時期です。森有礼の論も、その発表後まもなく馬場辰猪が一八七三年刊行の *An Elementary Grammar of the Japanese Language* の序文で指摘したように、[57] 英語を話す エリート階級と日本語を話す一般大衆といった国民の不幸な言語的分裂の危険など 大事なことを見落とした論でした。フランス語がよく出来るわけでもないのに、国語に採用するのはフランス語の方がよいかもしれないといった志賀直哉の論はいっそう欠陥の多い論でした。何十年か経って振り返れば、グローバル化時代に対応するため大学での英語の授業を急に増やすといっ

た試みも、大切な事を見落としていたと思われるのではないでしょうか。このこととの関連で、私が思い浮かべるのは、人間を含む動物行動学の研究によってノーベル賞を受賞したローレンツ（Konrad Zacharias Lorenz）（1903-1989）が、同じ種に属する生物間の競争によって起こる生物的変化が、違う種に属する生物を含む大きな環境というコンテクストで無意味な場合は、進化をより高いレベルに進める上では不毛だという指摘した際に、人間が従事する熾烈な同種間の生存競争のネガティブな意味にも読者の注意を喚起していることです。[58] 今日のように文化的多様性を失いかけた時代の人類間の熾烈な競争には、文化的な多様さがあった時代にはあり得た創造的働きが失われて、遙かに恐るべき破壊的な結果をもたらしだしていることをローレンツは指摘しています。[59] 私はこのような競争の破壊力を弱めるためにも、グローバル化の時代にこそ世界文化の多様性を維持するために自国語と自国文化を大切にすべきだというメッセージがそこから読み取れるように思います。世界的な免疫学者であっただけでなく、エッセイスト、新作能作者としても知られた多田富雄の著作から読み取れるメッセージもほぼ同じです。「若い科学者は、小さな競争に現［うつつ］を抜かすだけでなく、自分の独自のアイディアを引っさげて、世界の科学者のコミュニティーに参加することが必要です。／そのためにも自国の文化を知ることは必須です」[60] と多田は言っています。京都で開かれた一九八三年の第五回国際免疫学会のプログラム委員長として一〇分もあけるのも大変な時に、三時間あけて鼓を習いに行きはじめた多田[61]は自然科学とはまるで異質に見える能の鼓によって長期的には科学者としての視野も深めたように感じられます。日本語と日本文化を過度に軽視すべきでない。私は英学の終焉を日本の教育の進歩と考えた漱石の判断の正しさは最近の出来事によっても覆されていないと思います。

福沢も『文明論之概略』の公刊直後の一八七五年九月から一八七八年五月頃まで書きつがれ、一九五一年ま

で公表されなかった「覚え書き」[62]では、「日本の進歩も西洋の説と日本の説と相交えてはじめて正を得べし」[63]とか「学問も西洋、法律も西洋、宗旨も風俗も悉皆西洋と心酔するときは、ついには国を挙げてこれを西洋人に授け、その支配を受くるに至らん」[64]といっています。今生きていれば、福沢もグローバル化時代に対応するため大学での英語の授業を性急に増やすといったことには反対したのではないかと私には思われるのです。

注

（1）松沢弘陽校注、『福沢諭吉集』（新日本古典文学大系　明治編一〇）、岩波書店、二〇一一年、一一五ページ。以下、『福翁自伝』からの引用個所は、『福翁自伝』だけを収録しているこの『福沢諭吉集』のページ数だけで表示。

（2）漢字の読み方で戸惑うような個所では、松沢校注『福沢諭吉集』所収の「福翁自伝」に附けてある振り仮名を［　］内に示した。それが底本にある振り仮名か校注者によるものかは区別しなかった。後に出てくる松沢弘陽校注、福沢諭吉著『文明論之概略』（岩波書店、一九九五年）などの他の引用文献についても同じように処理した。

（3）太田雄三『英語と日本人』、講談社学術文庫版、一九九五年、一二七頁。以下でも、株式会社ティービーエス・ブリタニカから一九八一年に刊行された初版でなく、講談社学術文庫版によって、著者名を省略して、出典表示。再引用されている文献の出典については当該頁を参照。

（4）『英語と日本人』、一二八頁所引。

（5）『英語と日本人』、一一三頁所引。

（6）『英語と日本人』、二一〇―二一二頁参照。

（7）『英語と日本人』、二〇九―二一〇頁。

（8）『英語と日本人』、一二六頁。

（9）『英語と日本人』、一三八頁所引。
（10）『英語と日本人』、一五一頁所引。
（11）磯野直秀『モースその日その日』（有隣堂、一九八七年）、二一六―二一七ページ。
（12）Edward S. Morse, *Japan Day by Day* (Boston: Houghton Mifflin Company), 1917, II, 205.
（13）磯野、二一六頁。
（14）林髞「語学と生理学」（財団法人語学教育研究所編『随筆集　日本人と外国語』、開拓社）、一九六六年、二五頁。
（15）『英語と日本人』、八三頁所引。
（16）『英語と日本人』、一六五―一六八頁参照。
（17）『英語と日本人』、一〇六頁。
（18）『英語と日本人』、一六四頁。
（19）太田雄三『〈太平洋の橋〉としての新渡戸稲造』（みすず書房、一九八六年）、一四頁所引。
（20）Yuzo Ota, “Difficulties Faced by Native Japan Interpreters: Nitobe Inazô (1862-1933) and His Generation,” in *Searching for a Cultural Diplomacy*, ed. Jessica C. E. Gienow-Hecht and Mark C. Donfried (New York: Berghahn Books, 2010), p. 191.
（21）太田、『〈太平洋の橋〉としての新渡戸稲造』、五四頁参照。
（22）太田雄三「『代表的日本人』―一書評をめぐって―」、『内村鑑三全集　月報一一』、岩波書店、一九八一年八月、一一二頁に全文所収。
（23）太田雄三『内村鑑三』、研究社出版、一九七七年、一五六―一五七頁。
（24）原文は、『内村鑑三全集』7、岩波書店、一九八一年、四八三頁。
（25）川澄哲夫編・鈴木孝夫監修『英語教育論争史』（資料日本英学史二）、大修館書店、一九七八年、一一一頁、『英語と日本人』、二〇三頁所引。本稿では川澄編『英語教育論争史』で使われている旧字体の漢字が新字体の漢字に変え

られているところがあることをお断りする。

(26)『英語と日本人』、二〇三頁所引。
(27) 川澄編『英語教育論争史』、一一一頁。
(28) 同、一一二頁。
(29) 寺崎昌男、第三章「高等教育」(海後宗臣編『井上毅の教育政策』、東京大学出版会、一九六八年)、四二四頁所引。
(30) 菊池城司、第二章「中等教育」(海後宗臣編『井上毅の教育政策』)、一九六頁。
(31)『英語と日本人』、一一三―一一四頁。
(32) 丸山真男・加藤周一『翻訳と日本の近代』(岩波新書、一九九八年)。
(33) 吉野作造ほか編『明治文化全集』、一六巻(日本評論社、一九二八年)、所収。
(34)『明治文化全集』、一六巻、四八二頁。
(35)『英語と日本人』、九八頁。
(36)『英語と日本人』、八八頁。
(37) 川澄編『英語教育論争史』、一一二頁。
(38) 同、一一二頁。
(39)『英語と日本人』、二一三頁。
(40) 同、二一三―二一四頁。
(41) 松沢弘陽・植手通有編『丸山真男回顧談』(岩波書店、二〇〇六年)上、一六四頁。
(42) 福沢諭吉著、松沢弘陽校注『文明論之概略』(岩波書店、一九九五年)、一五四頁。
(43) 太田雄三『E・S・モース』(リブロポート、一九八八年)、八二頁。
(44) 太田、『E・S・モース』の「Ⅲ日本紹介者の誕生」から「Ⅶ後世への遺産――日本の陶器および民俗資料の収集」

までの諸章参照。

(45) 太田雄三『クラークの一年』（昭和堂、一九七九年）、八六頁。

(46) Benedict Anderson, *Imagined Communities*, Revised Edition (London, UK: Verso, 2006), p. 149.

(47) William Lanouette with Bela Silard, *Genius in the Shadows: A Biography of Leo Szilard, The Man Behind the Bomb* (1993; University of Chicago Press Edition, 1994), p. 20.

(48) 加藤学園と群馬県太田市にあるぐんま国際アカデミーについての情報は Google 検索によって得た。

(49) 「ルポ日本だけれど全部英語の会社」『AERA』二〇〇二年一二月二〇日号、Vol. 15 No. 54臨時増刊、四―一〇頁。

(50) Wilder Penfield, *No Man Alone: A Neurosurgeon's Life*, Boston, Little, Brown and Company, 1977.

(51) *No Man Alone* の第五章 "Key to Understanding: Madrid 1924" 参照。

(52) Penfield, p. 163.

(53) Penfield, pp. 196-98 and Note 38 on p. 361.

(54) Jim Cummins, *An Introductory Reader to the Writings of Jim Cummins*, ed. Colin Baker and Nancy H. Hornberger, Clevedon, UK, 2001 や英仏二カ国語論文集 Jack Jedwab and Rodrigue Landry, Editors, *Life After Forty Après quarante ans: Official Language Policy in Canada les politiques de langue officialle au Canada*, School of Policy Studies, Queen's University at Kingston, Canada, 2011, など参照。

(55) 志賀直哉「国語問題」、川澄編『英語教育論争史』、七九九―八〇一頁。

(56) いわゆる第二公用語論をめぐる論争については中公新書ラクレ編集部＋鈴木義里編『論争・英語が公用語になる日』（中央公論新社、二〇〇二年）参照。

(57) 『馬場辰猪全集』第一巻、岩波書店、一九八七年、本文篇（英文）、一三―一四頁。

(58) 例えば、Konrad Lorenz, *Die Rückseite des Spiegels* (1963; München, Deutscher Taschenbuch Verlag, 1974), pp. 46-47.

（59）　例えば、Lorenz, *Die Rückseite des Spiegels*, p. 244や Konrad Lorenz, *Die acht Todsünden der zivilisierten Menschheit* (München: Piper, 1973), pp. 32-33参照。

（60）　多田富雄『落葉集語　ことばのかたみ』（青土社、二〇一〇年）、一一七頁。

（61）　多田富雄『懐かしい日々の対話』（大和書房、二〇〇六年）、二二三頁および藤原書店編集部編『多田富雄の世界』、二〇一一年、三七二頁。

（62）　家永三郎編『福沢諭吉』（現代日本思想大系2）、筑摩書房、一九六三年、三一八頁の解説。

（63）　同、三二七頁。

（64）　同、三三八頁。